



2025.2 vol.45

宮城県内外の生活支援コーディネーターと協議体の取り組みを発信

東松島市の作田浦自治会が主催する秋の恒例行事「芋煮会」(2024年10月14日)

令和6年度 市町村情報交換会を県内3か所で開催しました

宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議では、市町村情報交換会を10月～12月にかけて県内3圏域で開催しました。28市町村から、行政担当者・生活支援コーディネーターなど延べ117人が参加。「協議体の進め方」や「いま力を入れて取り組んでいること」などのテーマに沿って、お互いの実践について意見を交わしました。悩みに共感し、工夫を紹介し合うなかで、同席した連絡会議会員が助言をする場面もありました。

参加者の声 (抜粋)

今年度から生活支援コーディネーターになり、自分の取り組みが合っているのか悩んでいましたが、経験あるコーディネーターからお話を伺うことができ、たくさんのヒントをいただきました。

行政説明として、生活支援体制整備事業のガイドライン改訂に関する最新情報を整理された状態で聞くことができ、よかったです。市町村に対する説明根拠に活用したいと思います。



日ごろの悩みを話し合うことができ、従事年数の長いコーディネーターや連絡会議会員のお話は非常に参考になりました。



同じ圏域にいても日ごろ情報交換する場が少ないので、とてもよい機会です。孤独感が救われました。



アウトリーチやマッチング、広報紙の活用など他市町村の取り組みを知り、発想の転換や企画を得ることができました。



2層コーディネーターの動き方や、1層と2層のコーディネーターの連携についての意見交換ができ、参考にしたいと思います。



協議体の運営主体がバラバラのグループだったので、とても興味深い話ばかりでした。

業務報告をするときの見える化(数値)のよい手法や行政の評価について、今後情報交換のテーマに取り上げてほしい。



地域づくりは



写真1・作田浦地区の地域支え合い会議 (写真提供: 東松島市社会福祉協議会)

つながりづくり

東松島市作田浦の 実践と展望

住民同士のつながりをどう築くか。つながりを見守りや支え合いに生かす方策は——自治会や子ども会・育成会、サークル、ボランティアグループなどの活動から日々のお茶飲みやおすそ分けといった近所付き合いまでをフル活用し「誰もが暮らしやすい地域づくり」に挑む東松島市作田浦(さくたうら)の住民、民生・児童委員、生活支援コーディネーターの姿を追った。

仲間が認知症になったら

2024年9月30日、東松島市の矢本東市民センターで作田浦地区の「地域支え合い会議」が開かれた(写真1)。

地域支え合い会議は、市内に70ある自治会圏域または112の行政区圏域の住民が、専門職らと地域の生活課題や気になる人の情報を共有、個別支援や地域づくりの方向性などを話し合うもの。市の生活支援体制整備事業の第3層協議体と位置付けられている。

当日の参加者は作田浦のサロン・見守り活動グループ「楽楽会(らくらくかい)」のメンバー、民生・児童委員、介護・福祉の専門職、生活支援コーディネーターなど。議題は、サロンやサークルに通う人が認知機能の低下に見舞われた場合、周りの仲間はどう対処すべきか。実際にそうした事態が生じているとのことだった。

市社会福祉協議会の生活支援コーディネーターで同地区担当の眞籠孝史(まごめ たかふみ)さんは、認知症の人の社会参加や意志決定の支援のあり方について学ぶことを提案。楽楽会メンバーでサロンの世話人でもある60〜80代の女性6人に、認知症サポーター養成講座を勧めた。6人はすでにサポーターになっていたが、ステップアップ講座で「チームオレンジ」として活動できるようにする狙い。専門職と連携しやすくなり、安

心して当事者と関われるようになることを期待される。1か月後の10月28日、同じ会場でステップアップ講座が開かれた(写真2)。講師は眞籠さんのほか市中部地域包括支援センターの職員らが務めた。講義のあとのグループワークでは、認知機能が低下しても地元で盛んなパークゴルフを続けてもらう工夫や、人付き合いの苦手な高齢夫婦(夫の認知機能が低下)をサロンに誘うアイデアなどを出し合った。

一人暮らしでも安心

作田浦は市役所から東へ1kmほど、JR仙石線と国道45号に挟まれた住宅街の一角に位置する。交通の便がよく、周囲には商業施設や飲食店も集積し、かなり都市化が進んだエリアにある。248世帯524人が暮らし、高齢化率は34・9%(2024年4月時点)。



写真2・認知症サポーター養成講座(ステップアップ講座)



写真3・作田浦自治会が毎週月曜に開く「いきいき百歳体操の会」

「都市部にしては高齢世代を中心に住民同士のつながりはかなりできています」と自身も同じエリアに住む眞籠さん。

高齢世代のつながりの豊かさは、パークゴルフや自治会活動、子育て中だった若い頃の子ども会・育成会活動などで培われてきた。

現在、高齢者の活動の中心は自治会主催の「いきいき百歳体操の会」(写真3)と「作田浦パークゴルフ愛好会」の二つ。体操の会は週1回で20〜30人程度。パークゴルフ愛好会は会員約30人で活動は月1回だが、親しい会員が誘い合って週3、4回は一緒にプレーを楽しむ。月1回の活動日はプレーのあと、クラブハウスでのランチ会が恒例となっている(写真4)。

は、活動日以外にもお互いの家を行き来し、お茶飲みやおすそ分けを楽しむことが多い。体調不良や体力低下でパークゴルフなどの活動に出られなくなっても、家を行き来する習慣は簡単には途絶えず、孤立の心配が少ない。「そういうお付き合いで高齢の一人暮らしや夫婦二人暮らしの人たちの見守りが結構できています」

こう話すのは楽楽会メンバーで民生・児童委員の古畑たつ子さん(72)。自治会活動はもちろんパークゴルフにも参加。お茶飲み、おすそ分けといった近所付き合いもしつこいう。パークゴルフとお茶飲みの仲間の一人、佐藤あや子さん(83)の居間には古畑さん専用のイスがある。それほど行き来がひんぱんだ。

佐藤さんは19年前に夫に先立たれて



写真4・作田浦パークゴルフ愛好会の定例活動のあとのランチ会



写真5・家でのお茶飲みも盛ん(佐藤あや子さん宅)

以来一人暮らし。居間は近隣の女性たちのお茶飲み場で、古畑さんをはじめ多いときで7、8人が集まる(写真5)。

「仲間とのつながりがあるから一人でも安心」と佐藤さん。うっかり仲間知らせず外出して帰宅が遅くなる、家に明かりが点かないことを不審に思った仲間が電話を寄こしたり家を訪ねたりする。

つながりの輪に取り込む

同じくお茶飲みとパークゴルフの仲間、三浦代美さん(61)は2019年に「作田浦・地域猫の会」(写真6)を古畑さんとともに立ち上げ、会長を務めている。会員は20人ほど。

活動内容は、飼いのいない猫を捕獲、避妊・去勢手術を受けさせて

捕獲場所に戻し、エサやりやトイレの管理などを定期的に行うというもの。実働メンバーは三浦さん、古畑さんをはじめ40〜70代の女性6人。エサ場やトイレの設置場所の提供などで協力する会員もいる。実働メンバーによるエサ場とトイレの巡回管理は3週に1回程度で、これが高齢者の見守りも兼ねている。

地域猫の会は、それまでつながりがなかった、世代の違う女性たちが交流するきっかけにもなった。重病を患い車椅子生活を送った時期もある三浦さんは、古畑さんと親しくなったことがきっかけでパークゴルフにも加わり、体力が向上。「長時間歩いていられるようになった」と喜ぶ。

高齢者が参加する活動はほかにもいろいろあるが、いずれからも疎遠で、生活状況や健康状態が気になりな人が少なからずいる。そんな人たちを見守り、つながりの輪に取り込むことが、冒頭で取り上げた楽楽会の目標とするところ。

楽楽会は、代表の佐藤文子さん(80)が2018年、当時の自治会役員や古畑さんらに呼びかけ、足かけ2年がかりで翌年9月に発足。毎月第1金曜に地区集会所でサロン「作田浦お茶会」を開く。運営メンバーは当初は60〜70代の女性8人、現在は60〜80代の6人となっている。サロンの利用者(会員)は2025年2月時点で70〜



写真6・作田浦地域猫の会。活動が高齢者の見守りも兼ねる

90代の22人。メンバーは二人一組で22人の会員宅を定期的に戸別訪問し、サロンの日時や内容を伝える。この訪問とサロンの両面で気になる高齢者を見守る。

認知症の人を「講師」に

サロンは午前10〜11時半の1時間半。ラジオ体操、歌謡、お茶飲みとおしゃべりを楽しむ(写真7)。2025年2月7日の会は市社協を通じてエクササイズのインストラクターを招き、軽体操やボールなどを使ったゲームも実施。77〜89歳の男女15人が参加した。

運営費は年会費500円と毎回の参加費100円、それに自治会からの年間5万円の助成金でまかなう。

会員からは「普段会えない人とも会っておしゃべりができるのがいい」「近所に親しい人が少ないので、ここに来て友人と話するのが楽しみ」と

いった声が聞かれる。

代表の佐藤さんは「この活動で地域のつながりが広がったと感じます。訪問やお茶会で会員さんたちが待ってたよ、うれしいよと言ってくれて、かえって私たちが励まされます」と手応えを語る。楽楽会はいまやパークゴルフや体操の会と並ぶ作田浦の高齢者活動の第三の柱となっている。

チームオレンジとしての登録は見送られた。登録によって関係する会議への参加が求められるなど、メンバーの負担が増す懸念があるためという。

楽楽会は以前と変わらず、認知機能の低下した人でも、本人や家族の明確な拒否がなければ、粘り強く訪問、声掛け、サロン案内などを継続。状況に応じて随時社協や地域包括支援センターにも相談する。

眞籠さんは「登録する、しないは重要ではない」とし、こう説明する。

「つながりを切らない工夫や努力が大仕事。楽楽会のやっていることはチームオレンジと変わりません」

また、認知症の人の社会参加に関して次のように述べている。

「認知症の人は、どのような手助けがあればお茶飲みやパークゴルフを続けられるかを身をもって示す講師のような存在。高齢になれば誰でも認知機能が低下する可能性がありますから、認知症でもお茶飲みやパークゴルフに参加し続ける姿は、高齢期を迎える人た



写真7・楽楽会のサロン「お茶会」(2025年2月7日)

ちの希望になり得ます」

顔も名前も知らない…

つながりや社会参加についてのこうした認識を、まずは地域で共有していくことが必要だろう。この点については、高齢者よりもむしろ若い世代への働きかけが課題となりそうだ。

眞籠さんも指摘するとおり、作田浦は高齢世代のつながりは比較的豊かと言える。一方で、「60代以下の人は地域のなかで同世代やほか世代との顔の見える関係が、あまりできていないように思う」と古畑さん。「このまま年を取っていったら孤立する人が増えるのでは」と心配する。

高齢世代と現役世代のつながりの薄さを象徴するような出来事が2023年春に起こった。

作田浦では小学生の夏休み期間中、子ども会・育成会がラジオ体操会を開



写真8・作田浦自治会の芋煮会。約80人が参加した(2024年10月14日)

いていたが、コロナ禍以降中止されたままになっている。感染防止もあるが、仕事や子育てで多忙な父母たち、ラジオ体操の世話役を回避したいという切実な事情が見え隠れする。そこで、70代が中心の自治会役員が子ども会・育成会に「私たち年寄りには時間に余裕があるから、忙しいお父さんお母さんに代わって世話役をしてもいいですよ」と打診。しかし実現には至らなかった。子ども会・育成会のなかに「知らないおじいさんに子どもを預けたくない」「子どもを一人だけで行かせたくない」などの意見があったためという。

は、「顔も名前も知らない高齢世代の人から突然そんな提案をされれば、不安を感じて拒絶する人がいても仕方ない。昨今は防犯意識も高まってますから」と当時の会の判断に理解を示しつつ、「地域のつながりが薄いのが問題なんです」と事の本質を突く。ちなみに自身は自治会役員と親しいこともあり、ラジオ体操の提案を「いい話」と受け止めていた。

芋煮会に親子連れ多数

古畑知子さんは、コロナ禍以降すべての行事が休止していた子ども会・育成会の活動の再始動に着手。休止中に脱会してしまった人がいたり、そもそも入会しない人も増えている状況で、地道に戸別訪問を行って会の活動を説明、参加を促した。会員は2024年11月時点で10世帯13人。地区の小学生の半分ほどだが、春の歓送迎会や夏の交流会、父母による交通安全の見守り活動など、会の活動は徐々に復活してきた。

「私のようによそから引越してきた、知り合いもいないなかで子育てをしている親が少なくないはず。私は会の活動で友だちを持つことができました。楽しい行事を通して交流やつながりを広げていきたい」

自治会との連携や、自治会行事への参加促進にも力を入れている。たとえば、作田浦自治会の行事とし

ては最大規模の、毎年10月の芋煮会には、年齢制限はないものの従来参加者はほぼ高齢世代に限られ、多くても60人ほどだった。ところが2024年は約80人に増えている。要因は中学生以下の子ども16人とその両親、祖父母らが来場したこと(写真8)。子ども会・育成会がLINE(ライン)などのメッセージ・アプリも活用して会員に参加を呼びかけたことが功を奏した。バルーンアートなどの出しものも用意され、会場には子どもたちの歓声が響いた。閉会後は子どもから高齢者まで、全員で片付けや清掃を行った。

「関係づくりの第一歩」

自治会長の伊藤勇さん(73)は「世代を超えたコミュニケーションの場となった」と喜ぶ。小学4年の娘と芋煮会に参加した父母(ともに40代)は次のように話す。父親「我が子どもの頃、地元ではこういうイベントがたくさんあった。自分の子どもにも同じ経験をさせたい。家でゲームばかりしているより、こういう場所にいるんな人とふれあってほしい。うちは核家族で、子どもが高齢者に接する機会がない。親や学校の先生以外の大人と接するこういう場は、子どもの成長にもプラスだと思つ」

母親「私たちは引越してきたばかりで、家の周囲にどんな人がいるのかもよくわからない状況。親が留守の

ときに災害が起きたり、何か困りごとを抱えたりしたとき、子どもが近所を知っている誰かにすぐ頼れるといい。そのためには顔の見える関係がないと。芋煮会への参加は、その関係づくりの第一歩」

芋煮会のほか6月の防災訓練や7月の矢本東三運動会(作田浦を含む17自治会が参加)などでも、作田浦の子どもや親たちの姿が目立つようになっている。

二人の子を持つ親でもある眞籠さんは「地域づくりは子どもを軸に考えることも必要」と訴える。

「ここで育つてよかったと子どもたちが思ってもらえるようにしたい。そのためにも、世代を超えて楽しさを共有できる場づくりは大事。子どもが楽しめれば親も祖父母もついてきて、子どもと大人、大人同士など、多様な交流とつながりを広げられます」

ただし、とすぐにこう付け加える。「高齢世代が考える楽しさと、若い世代のそれはギャップがあります。同じテーブルでそれぞれの思いを話し、聞き、受け止めることから始めないといいません」

イメージされているのはかしまった会議ではなく、気軽に自由な懇談。これもまた、つながりと支え合いを生み出すのに欠かせない「第一歩」だ。

みんなの協議体運営の工夫

協議体の運営について、宮城県生活支援コーディネーター養成研修や事例発表会、情報交換会で出された県内の取り組みから、工夫とヒントをご紹介します。

第1層協議体は委員の入れ替わりがあり、そもそも地域包括ケアとは何かがわかりにくいという声が出たことから、協議体で町内のさまざまなサービスや暮らしぶりについて話し合い、わかりやすく漫画にした。また、活用の幅が広がるように漫画をDVD化し、声の吹きこみを協議体のメンバーが行った。自主制作で低予算でできた。DVDは、老人クラブなど地域活動の際に上映し、役場や郵便局などにも置いて誰もが気軽に視聴できるようにした。さらに、多世代に向けてDVDを鑑賞して感想を聞く会を開催し、啓発に努めている。

第2層協議体は、数年かけて段階的に全地区で立ち上げた。メンバーは、地域組織・個人・商店を問わず、地区ごとの強みを活かした構成。さまざまな地域・協議体ができる中で、市内で同じ方向性をもって取り組めるように、第2層協議体の合同研修会を企画するとともに、他の第2層協議体がどんな取り組みをしているのかを知る情報交換も行った。

その結果、自分たちの地区の取り組みを客観的にみて、地区を越えてアドバイスし合える要素が高まり、第1層協議体委員が第2層協議体の取り組みを知る良い機会にもなった。

協議体メンバーを固定せず、毎回テーマごとに該当する活動者等に声をかけて参集し、意見交換を行う。話し合うテーマは、それぞれ生活支援コーディネーターがアンテナを立てて地域をめぐって得た感触から話し合って決める。協議体で出た意見を踏まえ、「ここであの資源を紹介したら次の展開が生まれるかもしれない」「この人とこの人とつなげたら楽しい化学反応が起きそう！」などの地域づくりのイメージを膨らませる。

第2層の中に、さらに小さく区切った第3層協議体を置き、地域の中の出来ごとや気づきを共有して、住民同士・専門職を含めた関係づくりの場としている。第3層協議体の合同情報交換会を行う一方、第3層で出た話題を必要に応じて第2層や第1層協議体で共有し、地域づくりに活かす。



生活支援体制整備事業等に係る県内市町村の取組事例を収集・公開中！
下記URLまたは右のQRコードから、ぜひ参考にしてくださいね。

<https://www.miyagi-sfk.net/community-welfare/page-3484/page-14524/>

